



TITLE:

岡道男先生を偲んで

AUTHOR(S):

沓掛, 良彦

CITATION:

沓掛, 良彦. 岡道男先生を偲んで. 西洋古典論集 2001, 別冊: 87-89

ISSUE DATE:

2001-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/68714>

RIGHT:

岡道男先生を偲んで

沓掛良彦

わが国の西洋古典学の総本山である京大西洋古典学研究室の出身でもなく、その専門的知識から言えば素人の域を出ず、「西洋古典文学専攻」という看板を掲げていることさえ気恥ずかしい私ごとき者が、故岡道男先生の追悼文集に小文を寄せていることを、訝る方々もあろう。三十歳を越えてロシア文学研究から中途転向し、ギリシア文学の勉強を始めた私は、教室で岡先生の教えを受けたことはなく、また関西在住でもないため、日頃先生の警咳に接することもなかった。にもかかわらず、岡先生は私にとって師のお一人であられた。また事実、わずか六か月という短い期間ではあったが、かつて内地研究員として京大古典学研究室にお世話になっていた折に、岡先生と中務助教授（当時）のお二人に、指導教官として、御指導いただいたという御縁もある。されば私が密かに先生をわが師のお一人と仰いでいたとしても、お許しいただけるであろう。

岡先生に最初にお目にかかったのは、その昔私が大阪市立大学文学部に在職中のことであった。私が古代ギリシアに興味を持ち、ギリシア文学の勉強を始めていたのを知った同僚の鈴木照雄先生の御推薦で、おそろおそろ西洋古典学会に入会したばかりの頃であったが、当時大阪市大に出講しておられた岡先生に御紹介いただき、二言三言言葉を交わした記憶がある。その当時私はまだ岡先生の御著作をほとんど読んではいなかったのだが、松平千秋先生の高弟で傑出した西洋古典学者だと、京大文学部出身の同僚の先生から伺っていたので、気後れがして、教えを請う機会を逸してしまったのが悔やまれた。まだ四十代前半であられた先生の、いかにも謹厳な学者らしい風貌に圧倒され、まぶしいような気持で先生に初めて接した覚えがある。

西洋古典学会に入会したおかげで、当時助手をしておられた中務哲郎氏、また私とほぼ同年の橋本降夫氏、丹下和彦氏、久保田忠利氏をはじめとする京大西洋古典学研究室出身の俊秀の方々とも、親しくおつきあいさせていただいてしばしば酒を酌み交わし、時折京大の古典学研究室を訪ねて、松平先生や岡先生ともお話する機会ができた。このことは、当時大学院の先輩一人を除いて同僚にほとんど知る人もなく、一人で古典の勉強をしながら住み慣れぬ大阪の地

で孤独感に苛まれていた私にとっては、大きな慰めでもあり、またはげみともなった。京大西洋古典研究室では、開祖松平先生以来うるわしい「学酒合一」の境が成し遂げられているらしいことを知ったのも、その頃のことである。

先に触れたように、私が岡先生に直接御指導いただいたのは、内地研究員として京大へ行っていた折のことだが、お酒を御馳走になりながら、あれこれとお話を伺った折にも、細心精緻な学風で知られる先生の深い学殖が片言隻句の中にも窺われ、改めて己の浅学を思い知らされたものであった。岡先生に関する思い出と言え、これも京大へ行っていた折のこと、古典学研究室の秋のハイキングに同道を許され、岡先生御夫妻をはじめとする京大古典の方々と、一日秋の山道の散策を楽しんだことが懐かしく思い出される。その折奥様の手作りのサンドイッチやおにぎりを御馳走になり、最後は一同で比叡平の松平先生のお宅へ押しかけて大いに飲み、ソクラテスならぬ松平先生を囲んで論談風発、これぞまことのシュンポシオンという光景が出現したのは、羨むべきことであった。松本仁助先生、竹部琳昌先生などもおいでになり、和気あいあいの中で学問や酒のことが語られていたが、こういう雰囲気の中で学問研究に浸れる京大古典学の学生たちは幸せだと思ったものである。幸い、松平先生に始まる「学酒合一」の伝統は、岡先生から中務教授へ、さらには高橋助教授へと脈脈と受け継がれているものとお見受けする。

岡先生の学問については、私のような素人ではなく、他にそれを語るにふさわしい方がいようし、私にそれを語る資格はない。先生はエリュシオンの野に赴かれたが、多くを学ばせていただいたその御著書や御訳書は私の貧しい本棚を飾り、励みとも目標ともなっている。また先生は私がつまらぬ著書や訳書をお送りするたびに、読後感や批評を添えた丁寧なお便りをくださったが、謙虚にして誠実そのもののお人柄をしのばせるそのお手紙は自分の仕事に自信の持てない私を慰め、力づけてくれるものであった。それが、昨年十一月に拙著をお送りしたのに、珍しくお返事がなかった。ただ年賀状に一言お礼の言葉が添えられていたが、思えばその時、先生は既に死の病の床に伏しておられたのである。続いてやってきたのは先生の訃報であった。もう先生からお手紙をいただくこともない。それを思うと寂しいかぎりである。最後に余計な一言を加えれば、松平、岡両先生をはじめ京大西洋古典の方々には大変御迷惑であろうし、憤慨なさる方もおられようが、私にとっては大いに名誉なことは、京大の方々と親しくしているためであろうか、時折京大西洋古典の出身と間違えられることである。そういう折には、「残念ながら違います。まあ、松平、岡両先

生には、間接的には薫陶を受けたつもりでおりますが。」と答えることにしている。岡先生の六か月間の「弟子」として、その程度のことは大目に見ていただけたらと思っている。